

ハロー山梨演劇塾 YaYaYa 第 19 回公演

恋の戯源

～ゆりかもめに乗って～

作・演出 藤谷 清六



タイトル文字 山田 蒼岳
絵 関根 悠一郎

2018 年 9 月 8 日 (土)

昼/開場 13:30 開演 14:00

夜/開場 18:30 開演 19:00

2018 年 9 月 9 日 (日)

昼/開場 13:30 開演 14:00

会場: 甲府桜座

お問い合わせ / 土井マチ子: 090-4932-8147 Mail: kuninakadoi063@docomo.ne.jp

藤谷 清六: 090-3244-8006 Mail: maki@mozidas.co.jp

URL: <http://www.yayaya.co.jp>



キーワードは「ゆりかもめ」



元山梨県立大学教授
浜崎 紘一

万年青年の藤谷清六さんも自分が老境にあることによりやく気がついたようだ。実際、60歳で演劇活動を再開して以来早や10余年が経つ。

今回初めて高齢者が主人公の、しかも演劇人という似た境遇の男の「恋」をめぐる人情噺を書いたのも寄る年波のせいだと、私は忖度している。

ネタバレ的に言ってしまうと、「赤ちゃんがほしいの」という若い恋人・樹和子の願望をかなえてやろうと、「今さら赤ん坊、子育てって歳じゃない」（松永鶴子のせりふ）老源蔵は、恋心を抑えつけて七転八倒、彼女を他の男に嫁がせ、1年後には狙い通りに赤ん坊が産まれる。そこに漕ぎつけるまでの紆余曲折をドタバタ喜劇で大いに楽しませようという趣向である。それだけでなく老若世代間の意識ギャップを照明の変化で表現したり、ゲイの同性婚や若いカップルの子づくりの問題など劇の内容も盛り沢山だ。

中でも副題の「ゆりかもめに乗って」は意味深長である。実はゆりかもめが開通した1995年は、政府が本格的な少子化対策に着手した年なのだ。源蔵にも若いカップルの子づくり論争に対して「少子化ってなあ、いいことじゃねえからな」と言わせている。

源蔵が夜毎男泣きしてまで恋の成就を断念するのは、少子化を懸念する憂国の情からだったのだと、私は勝手に忖度しているのだが、皆さんはどうですか？

ゆりかもめの先にあるもの

ゆりかもめの先には何があるのだろうか？ 線路～誰もが何気なくその線を辿って遠い先を見やったことのある一組の線。その先は未来なのか、過去なのか？それとも現実に窓開く異なる世界なのか？それは何処で、何者の、いかなるところなのだろうか？

藤谷氏は、現実の世界のどこかしこに隠された窓を通して、まったく別の世界を見せてくれている。私たちは「今」を生きていても、同時に他次元の「今」を生きることが可能なのだ、と思わせてくれる。今回、トンネルの先の明かりの下には、「豚ネル座」に集う人々の物語があった。藤谷氏が愛するかたち、舞台の上の舞台～そして今回、そこは舞台裏の居酒屋のようだ。その入り口にいる受付のような門番のような、月日を重ねた空気感のつやっぱいお姉さん、そして口は悪いが芯は純情なまま年老いてきた主人公、源蔵。2人は、異空間の入り口で今日も酒を酌み交わし、情けを歌っている。

舞台に上ること異空間に入ることなのだ。そこに生きる人々は舞台に立つたびに、現実の何かを削り、傷口に新しい細胞分裂をおこなわせている。生命の誕生は新しい舞台の誕生だ。それは最も画期的な力として、集う人々に正の凝集力を与え、ひとり一人の人生におけるそれぞれの復活を導いている。



山梨県立大学教授
坂本 玲子

恋を成就しない男の優しさ。

今年もまた藤谷芝居の季節がやってきた。彼の芝居に掛ける情熱、エネルギーには脱帽するばかりだ。劇団と言えるほどの組織を持っているわけではなく、彼個人のプロデュース力や資金力（なんてあるわけない、と叱られそうだが）、芝居好きの男たち女たちからの厚い（熱い）信頼が、彼をしてこうも毎年毎年藤谷芝居が上演され観客を楽しませてくれるのである。さて今回は『源蔵の恋』というお芝居。何やら若い娘に老いらくの恋で一途に迫るのかと思いきや、どうもそうでもなさそうな人情味あふれる寅さんの恋のゆくえ。源蔵役の笹本さんの本業は画家、女性を描いては絶対の自信。また、実際画壇の評価も高く、その自信でどう源蔵の恋を、筆でなく絵の具でなく、言葉（声）で、あるいは表情で、仕草で演じきるのか注目の舞台、期待しよう。

藤谷芝居の特徴に「赤ちゃん誕生」がある。これまでの数々の芝居で計二十人ぐらいは赤ちゃんが生まれているはずだ。『赤ちゃん産むのは馬鹿、産まぬも馬鹿、どうせ馬鹿なら産まなきやソソソ』なんて冗談言っても響きを買う御時世だが、ますます進む少子化の中、藤谷芝居の赤ちゃん誕生は喜ぶべきことなのだ。もっとも藤谷さんは、「赤ちゃん」というより「いのち」そのものへの崇拜と存続に歓びを得ているのではないか。このお芝居では一組の出産、一組の里子を目論む。果たして結果は。そしてもう一つ、藤谷芝居の舞台装置の大胆な試みも見逃せない。台本には、ビルの一階は居酒屋、二階は稽古場とされている。そこで桜座では一階ステージを居酒屋に、二階畳のスペースを稽古場に使うというのだ。となると観客の席も一部変更。これがまた、意表を突いた空間となる。その空間で役者も客も日頃忘れかけていた人としての優しさ、思いやり、温もりを藤谷芝居によって取り戻すのだ。では、お楽しみあれ。



詩人・エッセイスト
古屋久昭

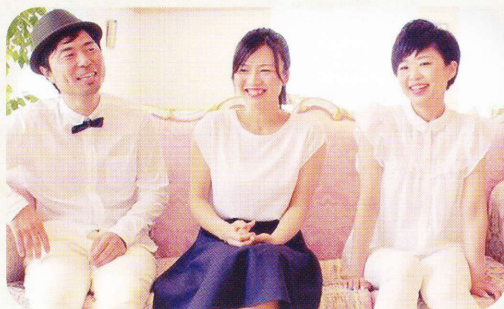
昇華されてゆく命の誕生

ある時人は出会いそして惹かれ愛結ばれる。どうも人生のおもしろさ、おかしさはそこから始まる様です。その後共に生活するにしろ、別れたにしろ、情熱は緩やかに褪めてゆく。では一体何が不変で確実なものなの？長いこと人生やってきてそんなものは何も無いと気付いた。その時から舞台でも日常生活でも「演技」の重要性がスリと身に染み込んでくる。ここ2～3年の藤谷先生の舞台はそれ以前より実に分かり易くなって参りました。今回の『源蔵の恋』も役者それぞれ愛情の紆余曲折がありそれでも相手を信じ許し、ラストは新しい命の誕生で全てが昇華されてゆく。私的には、それから先がどうなったのかが一番興味深い所で、又藤谷先生に続きの脚本をお書き頂きたい。今回は劇中劇シェイクスピアの場面で琵琶の音を入れさせていただきます。今日は有り難うございます。どうぞ最後までお楽しみ下さいませ。



薩摩琵琶
清水 えみこ

12年目にして初の一発 OK



作曲・演奏

チャイルドフッド

2003年 Erina と Mayumi でチャイルドフッドを結成。
2008年に Shimo を加えて現在3人で活動中。
富士の国やまなし国文祭 2013 イメージソング担当
アルバム「大切な時間」「純愛幼稚園の子守唄」発売中！

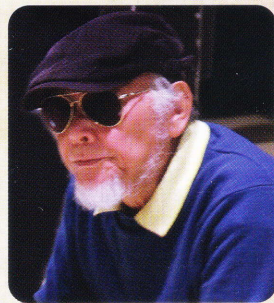
「おい、元気か。次回はこんな芝居を考えてるんだ」。チャイルドフッドへの楽曲依頼は藤谷さんからの電話で始まります。(たまに飲みの席で台本を渡されることもあったかな) ハロー山梨のみなさんとは12年のおつき合いになりますが、私たちは藤谷さんからの電話を心待ちにしています。

毎回「本番までに曲ができるのか」と思ってしまうほど藤谷さんから「愛の」1000本ノックを受けますが、今ではそのプロセスも楽しい(笑)。それだけ「今回の作品も楽しみだな」と思えるのが、ハロー山梨の皆さんが手がけるお芝居なのです。実は今回、12年にして初めて1発OKをいただきました。嬉しくもありびっくりでもあり、少し寂しくもあり…(笑)

「源蔵の恋」に携わる皆さんが創りあげる世界観に、チャイルドフッドの音楽がアクセントを加えることができたのなら私たちは光栄です。今回も素敵な機会をありがとうございました。私たちはこれからも、藤谷さんからの「次回はこんな芝居を考えてるんだ…」を心待ちにしています。

おいしいレストラン

レストランでは厨房に何人ものコックさんがいて、新鮮な食材と様々なスパイスを使って丁寧な仕込みをして美味しい料理を作ります。お客様(観客)はその料理にマッチするお酒とともに楽しいひとときを過ごします。役者(河原乞食)と観客の立場も同じことです。演出の役割は台本というメニューに従って、コックたちの意欲を引き出して、前菜からデザートまでをしっかりとお出しすることです。コックさんたちの経験と日頃の鍛錬が頼りです。そもそも役者は開演中の1～2時間をその人物として淡々と生きていなければなりません。料理にしても妙に凝った工夫をしたり、奇抜な味付けのものはむしろお客様の響きをかっってしまうことがあります。この辺をわかってもらうことが演出の苦労といえば苦労です。なお、レストランではテーブル、椅子、インテリア、装飾品、BGM、更に厨房では性能の良いガス、オーブン、鍋、フライパンなどが必要です。これらを揃えることがいわゆる裏方さんたちの仕事です。そして、お店ではマスター、ウェイター、ウェイトレス、ボーイ、ソムリエ、会計係などが重要です。これが演劇では制作の仕事です。さて、皆様本日は『源蔵の恋』というお料理をゆっくりと味わって楽しんで下さい。



作・演出
藤谷 清六

スタッフ

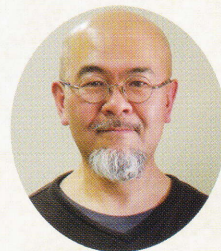
Special Thanks: 端唄協会評議員 / 藤本 純秀 薩摩琵琶 / 清水 えみこ 作曲・演奏 / チャイルドフッド
演出助手 / 島津 久美子 舞台監督 / 鷹野 亮司 舞台監督助手 / 渡邊 英里子 高尾 莊二 照明 / 飯野 洋光
舞台装置 / 蘭 光 音響 / 塚田 仁 メイク / 田中 来実 ヘアメイク / 小林 淑子 衣装・小道具 / HIRO
DVD制作 / 山中 勲 宣伝・デザイン / 山中 みゆき 制作 / 土井 マチ子 松永 博美 プロデューサー / 山本 眞樹



竜ちゃん 湯澤 紀保 (フリー・演出家)

藤谷清六先生のお嬢さん、涼子さんとの御縁で、山梨の演劇界をけん引している藤谷先生と出会うことが出来、何作かの作品を拝見させてもらい、その後は甲府の美味しい食べ物頂き夜が更けるまでお芝居談義。東京生まれで東京育ちの私にとって、いつしか甲府は第二の故郷（ふるさと）のようになりました。これは本当に良い先生と巡り会った、私は何という果報者か、と思っておりました。ところが、今度は突然の出演依頼。もう10年以上舞台上に立ってなく、しかも週末のお稽古に仕事の都合で一日しか参加出来ないスケジュール、これでは他の出演者の皆さんに迷惑をかけてしまう。辞退を考えたが、「え〜い、人生は一度っ切り！」これを機会に藤谷ワールドを体験、体感させてもらおう、そう思い、あずさに乗りました。そして出演以外にシェイクスピア場面の演技指導、出演者としての自分の役割と演技指導・・・超三流の私が大谷選手のような二刀流で藤谷ワールドに参戦して、時にはハラハラと、時にはビクビクと、9月に向けお稽古を重ねて参りました。皆様、本日はようこそお越し下さいました。ともかく頑張ります。皆様、最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

源蔵 笹本 正明



嬉しい表情は本当に嬉しいときにしか出来ないし、哀しい表情は本当に哀しいときにしか出来ないし、怒りの表情は本当に怒っているときにしか出来ないものだけれど、演劇ではフリでは駄目で、本当に嬉しい表情、本当に哀しい表情、本当に怒っている表情をしなければならないわけで、つまり嘘とバレないくらいの嘘をつかなければならないわけだ。これは実際にやれと言われてもなかなか出来ない。特に僕みたいな嘘をつけない正直者は、嬉しくもないのに嬉しい表情をしと言われても「そんなん出来るか！」と身体のどこかに抵抗感が生じてくるのが否めない。しかし身体の抵抗感に逆らいながら、「嘘とバレない嘘」をつく楽しさをほんのり感じ始めてもいるのです。

鶴子 伊藤 一美



柳橋一の置屋の娘、お鶴。大勢の芸者さんが置屋にいました。白塗り、濃い紅を見て、三味線の子供の頃は習って育ったのでしょうか。いつもそばにいた源さんとは、幼なじみ。弱虫源さんにお鶴はおまじないをしてあげていました。「ちちんぷいぷい、痛い痛い飛んでけ!!」いつ頃からだろう、源さんを好きになったのは？ 幼なじみって、ひと言話せば分かってしまう。いや、言葉に出さなくても源さんとお鶴は心が通じあえているのです。足腰立たなくなって、くたばっちゃうまで二人はずっと・・・。

粹で心のあったかいお鶴さん。口は乱暴だけど。どこか憎めない。そんなお鶴さんに出逢えて幸せです。どうぞ、お楽しみください。

院長 佐々木 猛



「なんで演劇をやっているの？」と聞かれることが多い。自分自身でもわからないので「縁がありまして・・・」と答えることが多い。そこで魅力について考えてみた。

演劇と出会って数年経つが、一番大切だと思うことはチーム力である。観に来てくれたお客さんが最も目の行くところは役者かもしれない。しかし、演出家や舞台監督、音響や照明、舞台装置など、裏方やスタッフの活躍なくしては、舞台は完成しない。このように一つのチームで作品が完成しているのだ。そのチーム力が作品の魅力に繋がっているし、そのことが垣間見える演劇というものに魅力を感じる。

これからもチームの一員として、みんなのために魅力ある作品づくりに携わっていきたい。

樹和子 関根 涼子



「何もしないこと」

今回の【源蔵の恋】では、自分自身の演劇の在り方をあらためて考えさせられた。

せめて一時でも「本当に、台詞を聞く」という一瞬を感じてみたい。ひとつひとつの言葉を『ことだま』に載せて届け《その人》として幕開きから最後まで舞台の上で生きてみたい。

不器用な私は、何時もただ一步一步階段を上っていくのみ・・・

お客様に少しでも楽しいひとときを過ごしてもらいたいと願いながら・・・

本日は残暑厳しい中、ご来場本当にありがとうございます。